

# 激動の中を行く

与謝野晶子

青空文庫



人生は静態のものでなくて動態のものであり、その固定を病的状態とし、その流動を正統状態として、常に動揺変化の中にあるものであるということは説明の必要もないことですが、戦後の世界は戦前においてさまで優勢でなかった思想が勃興ぼっこうし初めたために、経済的、政治的、社会的のいずれの方面においても、これまでになかった急激な動揺変化を生じて、それがために人間の思想と実際生活とは紛糾に紛糾を重ねようとしています。即ち今日の新しい合言葉となっている人道主義とか、民主主義とか、国際平和主義とかいうものは、戦前において学者、詩人、社会改良論者、宗教家等の空想として、大多数の人類から軽視されてい

たものですが、今は普魯西プロシヤのカイゼル父子とそれを繞めぐっていた軍閥者流とが代表として固執していた旧式な浪曼主義ローマンに根ざす軍国主義や専制主義がこの度の戦争の末期において頓挫とんざしたために、英仏米諸国の一流の学者、政治家、芸術家に由つて支持される新しい浪曼主義に根ざした人道主義や民主主義の思想が天下の権威であるが如き外觀を呈するに到りました。そうして、今や世界は、この新しい権威である思想に向つて俄にわかに自己の生活を適應させるために照準の大転換を行おうとして焦燥あせる者と、この思想に反抗して時代遅れの専制的、階級的、官僚的、資本家的の旧思想を維持するために、あらゆる非合理と陰險と暴力とを手段として固執する者と、この急劇な世界の変化に対し、こういう場合に処す

べき修養と訓練とをそれまでから欠いていたために、どうすれば  
 好いか、全く策の出いざる所を知らないで徒いたらに狼ろう狽ばいして右往左  
 往する者と、大体においてこの三種に分つべき人々に由つて未み曾ぞ  
 有うの混乱状態を引起しています。

私はこれを以て人類がやむをえず一度経験しなければならぬ  
 過程であると思ひます。母が一人の子を生むにも精神と肉体との  
 過すくなからぬ苦痛を払います。人類が遠く釈し迦やや基キ督リスの時代からあこが  
 れて来た、愛、正義、自由、平等を精神とする最高価値の新生に  
 向つて、大おお股またに一つの飛躍を取らうとするには、八百万人の死  
 傷者と三千億円の戦費とを犠牲としてまだ足らず、更に思想的、  
 経済的、政治的、社会的の猛烈な戦争と混乱との中に、劇甚な苦

痛の試錬を受けねばならないのは理由のあることだと思えます。

新しい浪漫主義の代表者であるウイルソン大統領の戦時中から今日に到るまでの度々の提議は、一語として新時代を指導する聖經風の金言でないものはありません。いにしえ古から大国の元首にしてウイルソンのように正大と高華とをこうか極めた提議を、ウイルソンだけの徳望と権威を持ちつつ世界に対して指導的に為し得た者があるでしょうか。私はウイルソンの人格の偉大であることを驚嘆しています。しかしそういう特別に飛び離れて偉大な人格が今日もなお世界に存在する如くに見え、大多数の人類がそういう偉大など見える人格に由つて音頭を取つてもらわねばならないという事実が、私の考察では、まだ世界の文化が非常に偏頗へんぱな状態にある証

抛であり、従つて大多数の人類がウイルソンの提議に現れたような正大な思想を、何の凝滞ぎょうたいも曲解も反抗もなしに、空気を吸い水を飲むように、安々と肯定し、受容し、味解することの出来る程度に達していかないものであることを思わせませす。

民主主義ということとは、大多数の人類が平等の機会と、平等の教育と、平等の経済的保障とに由つて、すべて平等に最高の人格を完成することを、その極致としてしているものであると私は解しているのですが、この解釈にして誤っていないならば、大多数の人類がまだ完全に民主主義の意義さえ知らず、人格の差異の甚だしい今日において一躍して容易にウイルソンの提議通りの世界改造が実現されようとは考えられません。ウイルソンのような思想

はまだ特別に優秀な人格を持つている少数者の間の思想です。その思想は人類の平等化を目的とする民主主義であつても、その思想の主張者が高い飛び離れた位地において、まだ階級的に指導者または支配者という態度を以て大多数の人類に臨まざるを得ない有様である限り、それが果して勝利を得て、大多数の人類の間に家常茶飯じょうさはんとして普及することを疑わぬにしても、それまでには多少の期間を要することは免れがたく、その期間には幾多の逆流があり、幾多の故障の起ることを予想せねばなりません。現にウイルソンの思想を講和条件に具体して決行しようとするれば各国の軍備の絶対的撤廃を主張しなければならぬはずであるのに、ウイルソンの代表する米国では、反対に自国の海軍の大拡張を声明



して世界の人にその一大矛盾を掩おほうことの出来ないような見苦し  
い現象のあるのは、民主主義の本場である米国においてさえ、国  
内における複雑な政争関係から、ウイルソンをして敢てこの一大  
矛盾を忍ばしめるに到ったことが想像されます。

私はウイルソンだけが唯だ一人傑出した大人格であると考えて  
いません。ウイルソンぐらいの愛と識見と勇氣とを持った人格は  
我国の少壮学者たちの中にも幾人かを数えることが出来ると思う  
のですが、世人がウイルソンとかロイド・ジヨオジとかだけの特  
に崇拜して殆どほとん神様扱いにするばかりに推尊するというのは、そ  
れだけ世人がまだ他人に対する公平な批判力を持たず、自己の力  
量をウイルソンの力量と比較して同等に信頼し得るだけの修養も

自覚も持っていないことの反映に過ぎないのです。民主主義の徹底する時代には偶像崇拜の思想の幻滅すべきは勿論のこと、法外な英雄崇拜の思想もまた自我の退嬰萎縮たいえい いしゆくとして峻拒しゆんきよされねばならないことだと思ひます。

こういう風に、人類の教養と訓練とに優劣の差が甚だしくあつて、思想的には急進派と保守派と無定見派、経済的には富豪と中産階級と第四階級、政治的には官僚と、商工業者と労働者、こういう風に分離して、それが互に反撥し合つてゐる限り、人道主義や民主主義を標準として真実に全人類の生活を浄化するということは、まだまだこれを未来の時日に待たねばなりません。

殊に近代文明の中心から遠ざかつていた日本人においては、こ

れまで久しくそれらの理想とは反対の思想の中に養われて来た者です。現にそれらの反対の思想が日本のあらゆる方面に浸潤して容易に抜きがたい勢力を持っているのです。日本人は個人の魂から深海の魚のように自覚の眼をなくすることのみを強制されて来ました。個性の尊貴とか人格の自由独立とかいう普通教育として最も大切な部分は、日本のどの学校においても教えられずに来たのです。教えられる所は、何事も要するに唯だ少数の権力者と、少数の資本家と、一人の家長とへの奴隸的奉仕に役立つという以外のことではないのです。教育ばかりでなく、宗教も道徳も専ら奴隸的奉仕の器械たるべく他律的に日本人を圧抑する手段たるに過ぎません。そのうえに私たち婦人にあつては一切の男子の下風に

立つてそれに奉仕する絶対の屈従を天命とし、無上權威の道德として課せられているのです。それがためには、特に婦人を愚にして魂の覚醒を禁圧する必要から、男子と対等の教育を私たちに施すことを拒み、名は高等女学校卒業といいながら、男子の中学の二年生程度にも匹敵しない低級な教育を、文明国の体面を保存する言訳だけに授けて置くに過ぎないのです。男子とても教育の自由を実際には許されていないのですから、高等教育を受ける男子は少数の経済上のぎょうこうしゃ僥倖者なに限られ、その少数の男子も卒業の後には官僚となり、財閥の成員乃至奉仕者となる人たちが大部分を占めているのですから、大多数の日本人を無学無産の第二次的国民として蔑視する階級思想と、日本の政治、学問、財力のいずれ

をも少数者の福利のために独占しようとする専制思想とは、次ぎにその立派な後継者を得て繁昌しつつあります。

こういう保守思想がまだ優勢を示している日本において、人道主義や民主主義の思想が容れられず、反対に危険思想であるが如き冤<sup>えんめい</sup>名をこれに着せようとする頑冥な反抗を見るのはやむをえない事だと思ひます。独逸<sup>ドイツ</sup>という外敵に勝つた各国の人道主義者は、これより更に、その各の国内<sup>おのおの</sup>における非人道思想や、専制思想と戦わねばなりません。日本人の国内におけるこの意味の戦いは、最も多くの苦闘を覚悟する必要があると私は考えます。

新しい人間生活の方針である唯だ一つの理想を、自我実現と愛と正義との方面から見て人道主義と名づけ、人類平等の方面から

見て民主主義と名づけたのであると概括して考えている私は、これを一言に簡約して新理想主義と呼びましょう。そうしてこの新理想主義を拒む保守主義者の言動が既に日本の各方面に起つてゐることは、敏感な自由思想家の見逃さない所であろうと思ひます。その一つをいえば、官僚的教育者の集団である臨時教育会議が、最近に女子教育を以て家族制度の精神に集中せしめたいという事、及び国民の思想を統一しようという事を政府に向つて建議した事実などがそれでしょう。

かつては家族制度を必要とした未開時代もありました。しかしながら家長一人の力で全家族の衣食と教育とに要する経済的条件を負担することが出来ない上に、個人の欲望が大きくなり多様に

なつて、家族の各があながち父祖以来の家業を守ることを好まず、  
何<sup>なんびと</sup>人も適材を抱いて適所<sup>はし</sup>に奔ろうとし、また父祖以来の家業を  
守ろうとしても、その家業が現代に適しないものであったり、あ  
るいは辛<sup>かう</sup>うじて家長一人に属する家族の最小限度の経済生活を支  
えるに足つて、到底その他の大家族を養うことが出来なかつたり  
する現代の家庭の経済状態において、どうして家族制度を維持す  
ることが出来ましょう。家族制度の今一つの要素となるものは親  
子兄弟という血縁関係ですが、今日の実際生活においては、第一  
に前に挙げた経済状態の圧迫がその血縁関係の結合をも解き放ち、  
その上、各人の事業欲や名誉欲も手伝つて、戸主以外の青年男女  
をその故郷の家に固着させて置きません。家族制度を最も遅くま

で守持するであろうと思われる農家が、かえつて第一にその子女の大多数を他郷の人たらしめねばならない時代となっています。都会における戦後の失職者に帰農を勧誘するような事は、この理由から、或程度以上は実行しがたい、無理な註文であるのです。家族制度を維持せよと強制することは、一般国民の経済状態を考えない官僚教育者の僻説であつて、人と制度との主客関係を顛てんと倒し、制度のために個人の自我発展を阻止し、個人の活力を圧殺して顧みないものだと思ひます。

たかだやすま

高田保馬氏の新著『社会学的研究』の中には、また特殊の見地から家族制度に対する弱点が暗示されています。即ち人間が家族的ないし乃至民族的というような關係に由つて小さく結合する事は、そ



れが内に向つて鞏固きようこであるほど、それだけ排他的精神が強く働  
き、従つて社会的人類的大きな結合が困難になるといふ議論で  
す。私はこの議論に敬服します。家族制度の精神は一種の小さな  
党派根性です。他と自分とを水と油の關係に置いて分離し、新理  
想主義の極致たる、世界人類を以て連帶責任の共存生活体と見る  
精神と相容あひいれないものです。家族制度の排他思想を最も露骨に示  
すものは、貴族や富豪の家屋が塀を高くし門を堅くして、他に向  
つて小さな城塞じょうさいにひとしい威圧を示さなければ満足しないの  
でも見ることが出来ます。彼らはその家屋と庭園とを公開して民  
衆と共に樂もうとするような新理想主義的な雅懷を持つていない  
のです。また家族制度の下に家系つなに繋がる特殊の榮譽を世襲する

彼らは、祖先の美名と現在の爵位とを誇示して、他の一般民衆と分離し、幾段か高い名門貴種の人であることを是認せしめようとし、ます。みすばらしい家屋に住んで、平凡無能な祖先しか持たず、その上に何らの社会的地位もない私たち大多数の無産者に取つて、最も頑固な家族制度の中に旧式な生活を維持している大華族や大富豪ほど四民平等的の親したしみを持ちがたい者はありません。今は成金と称する新富豪さえも彼らに擬して、その邸宅と日常生活を民衆と區別し、その称呼をも御前様お姫様を以て自らせん僭しつゝあります。家族制度の結合が固まるほど社会と極端に分離する性質のものであることは高田氏のお説の通りだと思ひます。

私はまた家族制度に由つて縛しばられた生活ほど、唯今の時代にお

いては、道徳的に不良な状態にあるものはないという事を付け加えずにいられません。この制度の下にあつては、家長の命令が至上権を持っています。父母の保護監督を必要とする少年期にはともかく、それ以上の年齢に達して自由意志を持つ青年男女が、自己の権利と責任觀念とに由つて自主的に自己の欲求する行動を取り難いということは、いうまでもなく非常の苦痛です。彼らはカントのいわゆる自己目的のために存在する独立の人格者でなくて、家長の意志に由つて左右される第二次的人間として存在せねばならないのです。これがために家長と家族との間に忌<sup>いま</sup>わしい反目があり衝突があります。親と子と、兄と弟とが同じ屋根の下に住んで見苦しいかつ悲しい争闘を続けている家庭というものは、我国

の現在において随所に発見することが出来ます。女子が良人の選  
 択権を持たず、家長の意志のままに恋愛のない結婚に盲従してし  
 まうのもこの制度のためです。舅姑の勢力が嫁に対して良人より  
 勝<sup>まさ</sup>っているのもこの制度のためです。男子の遊蕩を寛<sup>かん</sup>仮<sup>か</sup>して妻妾  
 の併存を認容するのも、男女道徳以上に血統を重視する家族制度  
 の特権であるのです。この制度の中に因習的に住む者が思想感情  
 の乖<sup>かい</sup>離<sup>り</sup>と、物質的福利の争奪と嫉妬とに由つて、常に複雑にして  
 醜悪な小人的の私闘を絶たない事は、家族の延長である我国の親  
 族関係において特に顕著であつて、この事は大抵の人に思い当る  
 所があると信じます。

保守主義者は家族制度を以て孝悌忠信の保育所であるように考

えているのですが、実際は大抵の場合これと反対な結果を示しているのです。現に地方から都会に出て独立の生活を営んでいる者は、大学の教授、政府の大官、財界の有力者より工場の女子労働者に至るまで、多くは非常な勇断の下に家族制度の精神に背いて、かつて一度その郷里の家庭から離れ去った人たちであるのです。現代においては、このように家族制度を超越して、父母の膝下しっかを辞し、兄弟相別れて、各自の欲する所に赴いて活動するのが、かつて順当に孝悌忠信の実を挙げる結果になっています。これは決して男女の性別に由って相違のある事ではなく、現代における経済条件の必要と個性に根ざす独立生活の欲望とは、男をも女をも屋外と他郷との労働に就かしめ、特に男子よりもその数におい

て多い我国の婦人労働者は、工場におけるその瘦腕やせうでの稼ぎから生み出した賃銀に由つて自己の衣食を支え、それを以て家長の厄介すくなを勘くして、家にあつて反目と争鬪の中に暮している上流階級の家族制度的婦人に比べて、どれだけ現代道德の実行者であるか知れません。私が昨年九州旅行で聞いた事ですが、布哇ハワイや北米やその他へ出稼いぎしている彼地方の男女は、毎年勘くからぬ額の金を郷里へ送つて父母の慰安とし、弟妹の教育費に当てる者が多く、中には家倉を新築させ、田畑を買わしめる者さえあるといひます。もしそれらの男女が家族的制度の下に小さく固まつて郷里とどまに留とどまっていたら、果してそれだけの愛情を父母兄弟に寄せることが出来たでしょうか。

思想の統一に至つては、茲こゝにも官僚教育者たちの画一主義が專制的な威圧を示しつつあることを私は怖れます。ウイルソンは巴パ里リイのソルボンヌ大学の演説で「大学の精神は自由であり」という事を述べましたが、大学をすら官僚の牙がえい営えいに供して、その独立自由を確保しない我国の教育者は、人間の思想をも官営として一手専売しを強しいようとするのです。しかし思想の何物であるかを知る人々にあつては、官僚は勿論、如何なる偉大な人格が強制的に統一しようとしても不可能である事を識別するであらうと思ひます。何が世の中で自由であるといつても、人間の心の内に起伏し流動する思想ほど自由なものはありません。顔うりふたさえも個別的の特色を備えて眞実の意味にて瓜うりふた一二つというものはないのに、まして、

刻々に移動する思想は、個人の自発的なものほど個性の色彩が著しく、たとひ他人の思想を受け容れたものでも第二の個性に由つて着色され變形されないものはないのですから、万人万様の思想が存在するのは当然の事で、それらの思想が拮抗きつこうし、比較し、補正し、助長し合つて存在してこそ、人類の思想は自浄作用の中に深化と進歩とを遂げるのであると思ひます。昔から宗教、学問、芸術のいづれでも官營の一種に決つてしまえば、いづれもその本質の腐敗を招かないものではありません。堂上の和歌、聖堂の朱しゆし子学がく、ロダンののしが罵つた仏蘭西院体派の芸術、その実例はいくらでもあります。殊に官營の宜しくない事はその官權を以て反対の思想を暴力的に圧伏することです。思想の自由を奪うに至つては



思想の統一でも尊重でもなく、反対に思想そのものの発展を願わない者のする残忍不法な行為です。

思想は統一されるものでない。兵隊の数に応じて同じ帽を被<sup>かぶ</sup>らせ得るように、人類をして均一に同じ思想を持たせ得るものでない。同じ思想に停滞したり囚えられたりしないで、勝手に優れたものであると自認する新しい思想を提供してこそ、世界人類の創造的進化に参加して各人が実力相応の貢献を為し得るのであると思います。思想が一種に固定してしまつたら世界は化石状態となつて、人類は自我発展の余地がなくなり、何の生き甲斐<sup>がい</sup>もない退屈な中に退化し自滅し去らねばならないでしょう。

それよりも、今日において、何<sup>なんぴと</sup>人も互に自ら注意すべきこと

は、思想の統一というような閑問題でなく、この戦後に発生する雑多な思想の混乱激動の中を安全に乗り切ろうとするのに、その雑多な思想のいずれをも観察し、批判する事をおこた怠らず、それがたとい外観上如何に険峻なものに見えようとも、また温健なるものに見えようとも、必ずその内容の純正か否かを透察し、それを自分の思想の養料として採用することだと思ひます。生活の理想は他人の指導に盲従してはならない。必ず自分の批判を経て全く自分の思想となつたものを信頼せねばなりません。ウイルソンの唱える新理想主義にしても、私はその雷同者の俄にわかに多いことを頼もしげなく思ひます。戦争で独逸ドイツの負けたのを見て俄に独逸語の排斥を唱えたり、独逸の学問芸術までを罵つたりする軽佻な識者

の多い日本に、昨日今日威勢の好い民主自由の思想に何の省慮も取らず共鳴する人の殖えて行くのは一概に嬉しいとはいわれません。

私もウイルソンを尊敬する一人です。しかしウイルソンの唱えたが故に私は人道主義や民主主義に賛成する者ではないのです。貧弱ながら私の理想は私自身の建てたものです。それがウイルソンの偉大な理想と偶たまたま似ている所があるというに過ぎません。そうして、私は今日の私に停滞していようとする者でなく、勿論ウイルソンの理想に低徊しているような閑人でもありません。明日はウイルソンが彼れの大きな道を選んで前進するように、私は私で自分の小さな道を選んで前進するでしょう。固もとより次第に激増

する雑多な思想の混乱激動に出会うのは覚悟の前です。

私は一つの譬喩ひゆを茲こゝに挿さみます。巴里のグラン・ブルヴァルの

オペラ前、もしくはエトワアルの広場の午後の雑沓ざつとうへ初めて突

きだされた田舎者は、その群衆、馬車、自動車、荷馬車の錯綜し

激動する光景に対して、足の入れ場のないうに驚き、一步の後に

馬車か自動車に轢ひき殺されることの危険を思つて、身も心もすく

むのを感じるでしょう。しかしこれに慣れた巴里人は老若男女と

も悠揚として慌あわてず、騒がず、その雑沓ざつとうの中を縫ぬつて衝突する

所もなく、自分の志す方角に向つて歩いて行くのです。雑沓に統

一があるのかと見ると、そうでなく、雑沓を分けていく個人個人

に尖せんえい鋭な感覚と沈着な意志とがあつて、その雑沓の危険と否と

に一々注意しながら、自主自律的に自分の方向を自由に転換して進んで行くのです。その雑沓を個人の力で巧たくみに制御しているのです。私はかつてその光景を見て自由思想的な歩き方だと思いました。そうして、私もその中へ足を入れて、一、二度は右往左往する見苦しい姿を巴里人に見せましたが、その後は、危険でないと自分で見極めた方角へ思い切って大胆に足を運ぶと、かえって雑沓の方が自分を避けるようにして、自分の道の開けて行くものであるという事を確めました。この事は戦後の思想界と實際生活との混乱激動に処する私たちの覚悟に適切な暗示を与えてくれる気がします。

保守主義者の反抗思想の中には随分莫迦ばか々々ばかしいものがあります。

す。或婦人雑誌に法学博士三瀧信三氏みつましんぞうが婦人職業問題に反対して「欧米において婦人が何々の職業を与えられているからというが如き単なる理由の下に、婦人の職業を徒らいたずらに奨励するが如きは、家族主義の我国としては破壊的の考えといわねばなりません。：婦人が進んで家庭から離れようとする如き考えは決して健全なものと思われません」といわれた如きは、博士こそ余りに「単なる理由」の下に軽率なる断案を下されたもので、博士は我国の女工八十万の家庭事情が経済的と倫理的の両方面から、彼らを職業婦人たらしめねば置かないという重要な理由を看過しておられるのです。彼らにしてみてもし工場労働者とならなかつたら、餓死するか醜業婦となつて墮落するかの外に道はないでしょう。

三渚博士のお説で更に笑うべきは「外国の事柄を借らずともよい」という単なる理由から、西洋音楽を排斥し、サンタクロスの代りに大黒様の名を挙げ、家庭においてパパとかママとか呼ばせていることを攻撃し、正月の遊びにも西洋趣味の物でなくて東海道々中双すごろく六を用いて欲しいと望んでおられる事です。日本音楽が西洋音楽に比べて非常に劣等な位地に停滞しているものである事は、新進の音楽学者兼かねつねきよすけ常清佐氏の日本音楽論を読まれても解ることです。兼常氏は日本音楽を西洋音楽に勝るとするのはこ蝙蝠うもりを見て飛行機より偉大であるとするに等しいといわれました。博士は外国の輸入物を嫌われることがまるでペスト菌にでも触れられるようですが、日本の法律が範を独逸に採っているのは勿論、

古くは雲上の御称号の文字を始め、今日の三瀦博士の姓氏の文字までが外国からの移植であつて見れば、パパといい、ママというのも決して忌むべき理由はありません。博士はチチ（父）ハハ（母）という言葉を純粹の国産だと思つておられるのでしようが、進歩した言語学ではそれが支那の古代語であることを証明していただきます。外国産の輸入を嫌つていると、古代人の尊重した鏡までが、日本で発明した「鈴れいきょう鏡」という鏡を除く以外は、すべて支那へ返さねばならない事になるでしょう。三瀦博士のお説は一笑に附し去つても好いようですが、これを突き詰めて行くと、博士のお考とは反対に、古来の日本文明を破壊すると共に、新しい日本文明の建設を阻害する結果となるのを遺憾に思います。これと同



様の保守的俗論がなお続々と日本人の間に頭を挙げるでしょう。私たちは独自の見識を以て今後のあらゆる反動思想を批判し取捨せねばなりません。（一九一九年一月）

（初出不明）



# 青空文庫情報

底本：「与謝野晶子評論集」岩波文庫、岩波書店

1985（昭和60）年8月16日初版発行

1994（平成6）年6月6日10刷発行

底本の親本：「激動の中を行く」アルス

1919（大正8）年8月初版発行

入力：Nana ohbe

校正：門田裕志

2001年12月22日公開

2012年9月15日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 激動の中に行く

与謝野晶子

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>